

特別寄稿

熊本地震における盛岡赤十字病院の医療救護活動

盛岡赤十字病院 第一循環器科部長・医療社会事業部長

齋藤 雅彦

1. 熊本地震による被害状況

大規模災害としての2016年熊本地震の特徴は、震度7の揺れが28時間の間隔で続けて発生し住居等建物へのダメージが深刻であったこと、余震が多発し建物倒壊の恐れから多くの避難者が車中等へ避難したことであった。本震の翌日である4月17日に避難者数はピークとなり18万3882人、避難所数は855か所に達した。発災から1か月経っても1万305人の避難者が234か所の避難所に居住していた。

また医療機関のダメージも甚大で、熊本市内の基幹病院群も建物損壊やライフライン途絶を生じた。特に熊本市民病院は建物の被害が大きくすべての診療が不可能となったため、多数の傷病者が他の病院へ殺到した。また発災急性期には入院継続不能となった病院の患者を他院へ移送する「病院避難」が多数発生した。

その中で基幹災害拠点病院である熊本赤十字病院は一部損壊するも、救急外来のスペースを拡大して診療を継続し、他院で診療できなくなった患者を多数受け入れた。断水中は診療用水を優先して職員用水を徹底的に節水し、他の自治体や自衛隊からの給水で乗り切った。熊本赤十字病院職員の4割弱が自宅以外へ避難し、その半数が避難所や車中に寝泊まりしていたため、増大した業務負荷への対応困難が生じていた。

2. 日本赤十字社による救護活動

全国から集まった赤十字救護班は益城町、西原村、南阿蘇村を中心とした医療救護活動を行った。

赤十字救護班はDMATと同様、前震では九州各県のみが対応したが、本震の後は全国活動となり6月2日まで救護班活動を継続した。救護班は被災地の救護所運営、避難所の管理支援の他、日赤熊本県支部の災害対策本部支援、熊本赤十字病院の業務支援を行った。救護班活動とは別に4月20日から6月5日までの7週間、全国の赤十字病院ネットワークから医師、看護師、事務職員を熊本赤十字病院へ1週間交代で派遣して業務支援活動を行った。被災者・支援者双方を対象としたところのケアチーム活動は6月13日まで、避難所の健康支援活動は7月末まで行い地元保健師などへ引き継いだ。

3. 盛岡赤十字病院からの派遣人員

赤十字救護班活動には医師1名、看護師3名、調整員2名、薬剤師1名の計7名で構成する救護班を1班ずつ4月20日から4月25日、5月1日から6日までの2回派遣した。熊本赤十字病院の業務支援には4月25日から5月1日まで医師1名、4月29日から5月5日まで看護師1名を派遣した。7月16日から21日まで看護師2名を健康支援活動に派遣した。派遣人員の詳細を表1に示す。

4. 活動内容

救護第1班は本震から3日後の4月19日に出動、仙台から福岡を經由して陸路と空路で日本赤十字社熊本県支部へ入り、熊本赤十字病院総合救急救命センターで診療活動、石巻赤十字病院救護班と協働して西原村内d E R Uの診療活動、西原村内の避難所

表1 熊本地震・盛岡赤十字病院からの派遣人員

救護第1班		救護第2班		熊本赤十字業務支援		健康支援活動	
派遣期間2016/4/19-4/24		派遣期間2016/5/1-5/6		派遣期間2016/4/25-5/1		派遣期間2016/7/16-7/21	
医師	齋藤 雅彦	医師	青木 毅一	医師	杉村 好彦	看護師	山口 裕子
看護師	高柳 明子	看護師	阿部 幸子			看護師	藤田美希絵
	下屋敷義郎		赤川 理佳	熊本赤十字業務支援			
	伊藤 嘉子		松原 知香	派遣期間4/29-5/5			
薬剤師	丹代 恭太	薬剤師	榎屋敷裕子	看護師	斉藤 美香		
調整員	佐々木康洋	調整員	阿部 賢二				
	石橋 峻		戸田 健				

を巡回，併せてエコノミークラス症候群の予防啓発活動を行った。福岡から仙台を經由し空路と陸路で帰還，当院で帰還報告と記者会見を行った。

救護第2班は5月1日出動，花巻から熊本を經由して陸路と空路で日本赤十字社熊本県支部へ入り，益城町総合体育館・益城町商工会で巡回診療，エコノミークラス症候群や熱中症予防のための啓発活動，同体育館裏でテント避難者を対象とした巡回診療と予防啓発活動や健康相談，同体育館駐車場で車中避難者を対象とした巡回診療と予防啓発活動，益城中央小学校で救護所活動，避難所巡回診療を行った。空路と陸路で福岡から花巻を經由し帰還した。

熊本赤十字病院の業務を支援した杉村副院長，斉藤美香手術室係長はそれぞれ4月25日，29日から1週間出動し総合救急救命センターで診療活動や救急研修医の指導を行った。他の業務支援医師・看護師・事務職員と協働して日勤・夜勤で救急搬送者多数を受け入れた。転落，深部静脈血栓症，自宅の片づけ時の外傷など震災関連の傷病者以外にも慢性疾患の増悪に代表される日常の緊急疾患も数多く搬送された。

健康支援活動では7月16日から21日まで山口裕子産科棟看護師長と藤田美希絵手術室看護師が熊本県西原村へ出動し，医療救護活動が終了後も残存している避難所で高齢者や認知症，障がい者の健康支援を行った。具体的活動内容は血圧測定などの健康チェック，声かけや見守り，避難所環境衛生チェッ

ク，生活不活発病予防のラジオ体操や脳トレ運動，避難所撤去の清掃などであった。活動中に避難所が3か所から1か所に集約され生活環境の変化から混乱も予測されたが，他の職種と連携してスムーズに受け入れできた。

5. 救護活動をふりかえって出動職員らが実感したこと

①自施設車両の確保

災害救護には自己完結の原則があるので，遠隔地派遣においても現地での人員移動や物品搬送を目的として自施設の車両を確保できれば理想的であった。他の赤十字救護班車両への同乗や車両借り入れには多少の不便を伴った。対策としては，災害地手前の地域まで空路で移動しレンタカーで救護班が現地入りする方法，当院から資機材や救護車両を陸路で災害地まで長距離移送する専門要員を確保し現地で救護班と合流する方法が挙げられる。ただし，レンタカー移動には運転者となる救護班員の疲労増大が伴い，長距離移送の方法では車両や資機材の現地到着が少々遅延するという問題もある。また今回搭乗した一般旅客機については，遠隔地にもかかわらず疲労が最小限でよかったとの感想があった。

②救護班員のこころのケア

派遣が決定した救護班員へ出動前に阿部幸子部長からこころのケアを目的としたブリーフィング

があり、班員自身のこころのケアや円滑なチームワークの保持に実際有用であったとの感想がきかれた。現地活動中のデブリーフィングは、帰路の車内で日々自然発生的に行われ救護活動に伴うストレスの軽減に有効であった。また災害地から派遣元へ直接帰還せず、保養地などでの休養や飲食が身体疲労やストレスを軽減するといわれているが、実際その有用性を強く実感したとの声が多数だった。

③情報共有・連絡・通信手段

現地では幸いインターネット環境が保たれていた。しかし他の災害ではネット環境の保障はなく業務用無線や衛星電話、衛星経由のインターネットを不自由なく使用できるような訓練が必要と思われた。また電源を確保できない場合を想定して、衛星電話ならびにPCの充電電源や車両から電源を供給できるカーコンセントの装備が望ましい。初動において当院と岩手県支部間の情報共有に改善の余地がみられた。公的な情報のほかに簡易で迅速な情報共有手段として当院災害救護関係者をメンバーとしたLINEが有用であった。

④食糧・補給

主食としてはアルファ米だけではなく、パン・カップめんがあってもよい。アルファ米には炊き込みやチャーハンだけではなく白米も欲しい。電源が確保できるとは限らないので手動でも湯が注げるポットがあったほうがよい。調理の必要がないきゅうり、トマト、オレンジなど現地の限られた条件の中でも栄養と楽しみの確保ができるような食事に期待したい、などの感想があった。発災から2週間以上経過してコンビニの品揃えが回復し飲食店の営業が再開するとこれらの問題は解消した。

⑤宿泊

災害救護の原則は野営とされていることを考慮すると、日赤熊本県支部や熊本赤十字病院の屋内に宿泊できたことは幸いであった。しかも場合によっては簡易ベッドやマットレスを使用できたり、夜勤者専用の仮眠室が確保され、熊本赤十字病院には最大限の配慮をしていただいた。発災急

性期には断水のためアルコール含有のウエットティッシュで救護班員各自が体の清拭を行った。ドライシャンプーを持参しなかったことが後悔された。ライフラインの復旧後はシャワーや入浴が可能となり、ウォッシュレットも使えるようになった。余震のため安眠が確保できない問題はそもそも解決が困難だが、おおむね宿泊環境には恵まれていたといえる。後続の派遣からはホテルへの宿泊も可能となった。

⑥今後の救護活動のために

事前の準備として救護資機材ならびに個人装備の把握と点検（救護員マニュアル参照）、日常業務で患者や他職種および院外関連機関との関わりの中から傾聴のスキルやコミュニケーション力を磨くこと、名刺など災害地で出会う初対面の関係者へ手短かに自己紹介する準備が必要と思われる。平時に催される災害訓練や研修に多くの職員が参加しておくことが望ましい。また様々な環境で情報を収集・分析・発信する目的でPCなど情報通信機器の操作やEMIS閲覧・入力、テキストエディタ・表計算ソフト・プレゼンツールのソフトに習熟していたほうがよい。現場ではトリアージ、ロジスティックの学習をベースにやった上で、さらに他の機関との調整を図る能力、現場で自分たちにできることを見つける能力、そしてその活動を実施する行動力が必要だと思われる。東日本大震災の被災地からの派遣であることがわかると、声を上げずにひたすらじっと耐え続けている避難所や車中泊の高齢者からその語りを自然に引き出した。寄り添う傾聴は2011年当時被災者であった私たちがかつて全国から受けた支援への恩返しである。

6. さいごに

災害救護は赤十字の存在理由であり組織の価値の根幹をなすものである。平時の診療活動を充実させる一方で赤十字ならではの真価を発揮すべく、資機材の充実や人的能力の向上に努めたい。